



森で出会えば…

～野山で感じるつながり記録～

田中 千晶

ポンポンポンの春

5月の連休前から夏日もありましたが、ほっこりあったか春が来た！【つくしの坊やもポンポンポン】な春が来た！このフレーズが出てくる【ポンポンポンと春が来た】という歌が大好きで、毎年春になると口ずさんでしまいます。どこからか香る花のにおい、まあるい気持ちになれる日差しのアたたかさ、動き始めた生き物たちの姿、ぜんぶに命のはじまりを感じることができる春。【おひさまこんにちは、キラキラ キラキラまぶしいな】なしあわせ～な小春日和。季節が変わるだけで、冬場はどんより沈み込んでいた気持ちが明るくなるのって不思議です。



地域によっては「ぼんぼん桜」と呼ぶそうなの。

こんな浮かれた大人がいる反面、春はソワソワ落ち着かない、春も気持ちが暗くなるという人も。4月の園なんてまさにそんな状況。新入園児の泣き声でいっぱい毎日。おうちが恋しくて、家族に会いたくて涙が止まらない新入園児に引っ張られ、いつのまにか泣き出してしまう在園児…ごたごた、ワタワタする部屋にいただけで気が滅入ってしまうのは子どもも大人も同じなんだよなあ…。

よし、外に行こう！

ワンワン泣いている子も、ピリピリ怒っている子もいつのまにか素に戻る魔法の言葉。「お外に行こう！」さあさあ、帽子被って、お外に行くために支度ががんばって、駐車場にまだママがいるならバイバイってできるかもよ？あれこれ誘い文句はありますが、大概「お外行こう！」につられて自然と動き出す子どもたち。春の自然遊びはソワソワ、ドキドキする子ども達をそっと包み込んでくれるのです。

自然保育、森のようちえんに出会った年から愛読している私の保育のバイブル、松本信吾先生の本には「自然物が子ども達に語りかけ、それらに子どもたちが応答するようにかかわる体験を繰り返すことで、

『自らが（自然に）能動的にかかわり、受け止められることで、次第にこの場を安心

できる場所だと認識する。』とあります。
(松本 2018) 子ども達と戸外で遊んでい
ると、いつの時期も自然が私たちに語り掛
けてくるように感覚があるのですが、春の
自然からは『ひょこっ』と突然顔を出すよ
うな、いつの間にかそばに寄り添われてい
るような不思議な感覚を味わうことができ
ます。



ひょっこり、マリーゴールドの赤ちゃん

この春1年生になったばかりの子との最
近のエピソード。まだ新しい筆箱の中にダ
ンゴムシとテントウムシを入れて元気に帰
ってきてくれました。大人は思わず『ゲゲ
ッ』とおどろいてしまいました。本人は
満足そう。「だってブランコのところにた
んやも〜ん!」「置いていかんようにせな
あかんと思ったから2匹入れたんやで。」
しまいには「さみしくならんようにこれ
も入れたで!」と赤鉛筆の横に添えられたシ
ロツメクサまで見せてくれました。ああ、
まちがいなくこの子が主体的に、自ら自然
に関わったんだな。その結果が「かわい
い!と心がときめいたダンゴムシを持ち帰
る。」という行動で、園のように遊びの素
材がない中で筆箱を入れ物にしよう!とい
う発想が生まれたんだな。ここで『あか
んでしょ!』『学校は園じゃないんだか
ら!』と言ってしまうのは大人の都合。
「もって帰ってきてもいいけど、逃がさん
ようにだけしてな〜」と声をかけました。
(その結果、毎週なにか生き物を持って帰

ってきて、宿題どころじゃなくなっている
のはいいんだか、どうなんだかです
(笑))

子どもたちは新しい環境下で保育者や教
師、友達など【人】に受け止められるより
も先に自然環境に受け止められる感覚を抱
くのかもしれません。ダンゴムシ、ありが
とう…。「楽しい!」「やってみたい!」と
感情が動く体験をするにはまず安心感や安
らぎを得ることから。不安でソワソワして
しまう春は、自然の中に入るとすーっと心
が安らぐ体験を共にできる大人でありたい
と毎年感じています。



参考文献

松本信吾[編著]広島大学附属幼稚園[監
修](2018)『身近な自然を活かした保育実践
とカリキュラム—環境・人とつながって育つ
子どもたち』中央法規出版